

● 竹林を知り尽くした研究者

竹を無駄なく利用

「竹の葉の表皮部分だけでなく、幹やその他の部分を使った製品も開発しよう」。タケックス・ラボ社長清岡久幸は決意した。

竹の性質については知り尽くしていたし、研究データ

の蓄積があったため約1年で新製品の開発に成功。05年には発売へこぎ着けた。

新製品はフロリング材「タケックス・フロリ

ー」や、天井や壁に利用する「タケックス・ファイバ

ー」といった建築材料。竹の肉質が微細多孔体である

ことから、断熱・吸音効果

や消臭効果もある。これらの開発によって竹を無駄なく利用できるようになり、コストダウンに成功した。

姿勢を明確に

06年10月には竹の総合活用企業を目指して、社名をフードテックスから現在のタケックス・ラボへ変更。

「過剰に存在する竹の使

用企業を目指して、社名を

フードテックスから現在の

タケックス・ラボへ変更。

勝つ

タケックス・ラボ

良い物を選ぶ母親の視点

主力の食品添加物にこだわらず、幅広い分野で竹にかかわっていく姿勢を明確にした。

約60日間で20段に成長する孟宗竹をはじめ、すべて

の植物のなかでも竹は驚異的な成長速度を誇る。その繁殖力でほかの植物のエリアに進出したり、日光を遮るなど、生態系を壊す要因となる。さらに地下茎も浅く、放置された竹林では土砂崩れが発生しやすい。これらは総称して竹害と呼ばれる。

「過剰に存在する竹の使

用企業を目指して、社名を

フードテックスから現在の

タケックス・ラボへ変更。

用企業を目指して、社名を

フードテックスから現在の

タケックス・ラボへ変更。

い道を提案して消費量を増やすと同時に、植物の生態系を回復させたい」。清岡がそう考えるのは自然のなりゆきだった。竹の葉はバイオマス燃料、幹は建材、

茎表皮は食品添加物にそれぞれ利用できる。竹害で悩む自治体などへ、竹を有効

活用するノウハウを提供。竹を総合的に活用するパイオニアとして竹害解決にも取り組んでいった。



驚異的な成長速度の竹は、一方で生態系を壊す要因となる

▲.....

清岡は強調する。食品添加物にして

も発がん性試験、急性毒性試験、ラットを使った90日間の反復投与試験などを相次ぎ行っ

て、安全性を確かめた。

株式上場も視野

「竹のバイオニアでありたい」。清岡はきっぱりした口調で語る。今後は製品のさらなる普及を目指すとともに、株式の上場も視野に入れている。

また、後継者について「その時、その時に合った人が経営してくれればいい」とあっさりと言語清岡。ただ、開発に関しては「母親の視点を引き継いでほしい」と熱心に言う。

「開発理念が浸透するよう、目」ろから繰り返し、社員に訴えている」と清岡は笑う。竹のバイオニアとして、やれることはたくさんある。タケックス・ラボの挑戦は始まったばかりだ。

(敬称略、この項おわり。京都支局・山路甲子が担当しました)

活用するノウハウを提供。竹を総合的に活用するパイオニアとして竹害解決にも取り組んでいった。

子供を守る

加えて「企業の視点ではなく、母親の視点で開発に取り組むのが開発理念」と

根底にあるのは、自分が入院したときに見た入院中の子供たちを看病する母親の姿だ。子供を守るの使命とし、子供のため良い品物を選んで与える。そんな

母親目線で不足のない製品を開発、提供することを開発理念とした。

加えて「企業の視点ではなく、母親の視点で開発に取り組むのが開発理念」と